

死者の日（A 年主日の福音を中心とする「靈的な読書」）

（一）聖書朗読：ヨハネ 6：37-40

イエスは天から降って来たのは、お遣わしになった御父の心を行うためである。御父が私にお与えてくださった一人も失わないで、終わりの日に復活させることである。子を見て信じる者が皆永遠の命を得ることである。

（二）カテキズムの響き：

カトリック教会のカテキズムの番号、主に #151、994、1031-1033；
他に #999、1001-1005、1033-1036；YOUCAT #160-162)

キリスト者にとって、神を信じることには必ず、神が遣わされた方、すなわち、神のみ心に叶う愛する御子を信じるのが伴います。なぜなら、御子は父を見たので、彼だけが神を知らせ、示すことができるからです。それだけではなく、イエスは私は復活であり、命であるといって、復活信仰をご自分に結びつけておられます。イエスを信じ、その御体を食べ、御血を飲む人々を世の終わりに復活させてくださるのは、イエスご自身にほかなりません。また、キリストを信じる者は、その模範に従って、貧しい人を顧み、自らの死をこのように御父に対する従順と愛の行為へと変容させることができます。

反して、神の愛を拒絶し、大罪を犯したまま死ぬ人々の靈魂は、死後直ちに地獄に落ちます。しかし、神の恵みと神との親しい交わりと保っていながら、完全に清められないままで死ぬ人々は、永遠の救いこそ保証されているものの、死後、天国の喜びにあずかるために、煉獄である浄化の苦しみを受けます。そのため、教会は死者の記念を重んじ、死者のために祈り、特にエウカリスチアの生贄をささげていました。また、死者のために施し、免償、償いのわざを勧めています。それは、死者が清められて、神の至福直観に至り、天国に入ることができます。

（三）カテキズムの学び：

『コンペンディウム』カトリック・カテキズム要約の番号 #205-206、209-213

ーキリストに結ばれて死ぬとは、永遠の命をもらいます。

ー天国の至福、煉獄の浄化、及び地獄の永遠の責め苦のことについての要理教育。

最後の祈り：

罪人が悔い改め、死者が浄化できるように、共同祈願として祈りを捧げます。終わりは「死者のための祈り」を唱えます。（『コンペンディウム』の付録A 共通の祈りの参考）